

「草木品」(『妙』『藥草喻品』)の思想解明〔下〕

——〈仏乗〉に対する『般若経』の逆襲——

荀 谷 定 彦

【⁽¹⁾V】

(1)

さて、第一段偈頌部は次のように始まる。

〔偈 1〕私 (= 釈尊) は“法” (dharma, 存在するもの、= 一切衆生) の王にして、“有” (bhava, 生き物) の (六道輪廻という一切苦を) 打破する者” (-mardana) として、世に出現したのである。(そして) 衆生 (sattva, 但し、ここでは、あくまで出家の比丘、比丘尼) の (様々な) “強い志向” (adhimukti) を見極めて、(それに応じた個々別々の) 教法を (衆生に) 語るのである。

〔偈 2〕(私だけでは無く) “心決定の (= 不動の) 覚智を得た” (dhīra-buddhin) “大勇” (mahā-vīra, ここでは“ブッダ”(仏)) たちは、“方便”でもって語った“仮の教え”たる 教法を永く守る (= 無闇に変更しない) のであり、(それ故に、その教法に秘められた) 秘密 (rahasya, = ‘saṃdhā’, 「仏の深い意趣」) もまた (永く己の心中に保持して直ちに) 生類 (prāṇin, = 出家の比丘、比丘尼) に語ることは無いのである。

〔偈 3〕(なぜなら) その当の (仏の) 智慧 (taj jñāna, 正覚内容) はこれまた (出家の比丘らにとっては) 難悟である (durbodhya) からで、(もし、仏が成道後、それをすぐ語ったとしても、) 突然に (聞いた) 愚者 (bālīśa) どもは疑惑を起すであろう。その当の大層愚かな者どもはそこから (かえって) 墮落してしまっ、迷うであろう。

〔偈 4〕(そこで、仏は) その者が (yasya) “どのような境地” (yathā-

viṣaya) にあるか、“どのような力量” (yādṛśakam balam) (の持ち主) であるか、に応じて個々別々の事由 (artha) でもって (種々の) 教法を説き、(その当の者の (邪) 見を) 正しい (ujjuka) (見) に糾すのである。

これら四偈は、凡そ、如来たる者の㊤世に“出現”することと、㊤その後の“説法教化”という如来の保有する特性 (guṇa, 功德)、それは、釈尊に絞って言えば、29出家、35成道の後、80入滅に至る四十五年間の行業は、ただただ衆生に対する“説法教化”に尽きるのであって、この“説法教化”という仏の偉大なる功業を長行部では、〔2〕、〔3- (A) ㊤ ~㊤、但し、㊤を除く〕で『大雲出現の喩』として述べ、〔5〕、〔6〕でそれを詳説していたのである。それ故、ここなる偈頌部でも、続いて次のように言う。

〔偈5〕 迦葉よ。譬えば、丁度、(三千大千) 世界に湧き起った雲が台地 (vasuṃdharā) を覆って、そこに生える (草木の) 全てを包み込む (ように)。

〔偈6〕 その当のものは (saḥ, = 雲)、〔大量の水を供給する者 (mahā-ambu-da) は〕⁽²⁾ 雷光の花環をつけ (vidyun-māllin)、声 (śabdha, = 雷鳴) を轟かせているもので、(それでもって) 一切の生類を喜ばせるであろう (ものである)。

とあって、ひたすらなる“説法教化”という、凡そ如来たる者の保有する特性を、あくまでも乾季の終りになって出現する大雲の雷光と雷鳴の織りなす自然界の事象に擬えているのである。

(2)

ところが、これに続く〔偈7〕、〔偈8〕は一変して、次のように言う。

〔偈7〕 (時に、雨季の始めに出現した大雲は、乾季の^{なごり}余波の厳しい) 太陽光線を遮えぎり、手の届く程低く (垂れこめて)、周囲を涼くして後、あたり一面に“水” (vāri) を注ぎかけるであろう (ものである)。

〔偈8〕 そして、その当の者 (saḥ, = 大雲) は、じつに少なからざる

量の“水の蘊”^{あつまり}(āpa-skandha)を(一切の草木に)等しく注ぎかけており、ぐるっと周りに降り注いでいるのであって、この台地(medini)に(生える一切の生類)を満足させている。

これは、先の〔偈1〕～〔偈6〕が、凡そ如来の有する㊶“出現”と㊶“説法教化”という秀いでた特性をもって、乾季の終り近くになって出現した大雲の、雷光を発し、雷鳴を轟かして、雨季の到来の直近なることを明示する自然界の事象に擬えて述べていたのであるが、それとは全く繋がることなく、極めて唐突に、大地に在る一切の生類——と言っても、ここでは一切の草木である——は、雨季の始めに湧き起る雲のもたらす大量の水によってこそ潤うという、自然界のありきたりの事象でもって『喩え』としているのである。それ故、この二偈は、〔偈1〕～〔偈6〕の主旨を全く理解すること無く、大雲と言えは、そのもたらす雨水が想起されるにも拘らず、そのことを、それこそ一言半句も言及しないのは“摩訶不思議”であるとして、ここに、大雲のもたらす大量の水によってこそ地上に生える草木は繁茂するという、全く別物の㊶雨季の始めに出現した大雲がもたらす大量の水と、㊶それによる地上の草木の繁茂という、『喩え』に“大変容”しているものであって、〔偈1〕～〔偈6〕は、余程後代になってから、ここに持ち込まれた異質の“第二次的後分”であること明白なのである。

次に、続く〔偈9〕以降を見るに、

〔偈9〕ここなる台地に(medinyā)生えている(jāta)ところの、何であれ、草木等^ら(oṣadhayāḥ、これは長行〔校訂3-(A)㊶〕の「草木群」(oṣadhi-grāma)を指しており、草木全般であって、「藥草」の意味は全く無い^(補1))、(即ち、)①～③の「草・灌木・木(vanaspati)」であれ、あるいは、④「(小)樹」(druma)、もしくは⑤「大樹」(mahādruma)であれ、

〔偈10〕あるいは、種々の穀物であれ、あるいは野菜であれ、(そして、それが)山に、また峡谷に、さらには藪^{やぶ}に(生えている)それ(yat)

であれ、

〔偈11〕 雲は（それら）全ての①～⑤の「草・灌木・木」を飽満させる。

（即ち）乾ききった台地を満足させ、草木等（*oṣadhīḥ* ①～⑤）に（水を）降り注ぐのである。

これら三偈のうち、〔偈9〕は、〔偈8d〕の「この大地（に生える一切の生類）」について、それらは「草・灌木・木」であり、その「木」（*vanaspati*）については、その他に「（小）樹」、「大樹」の、合わせて三種があることを述べている。そして〔偈10〕は、〔偈8d〕「この台地（に生える一切の生き物を）満足させている」を後の書写生が補足説明したもので、無くもがなの“後分”に過ぎない。

この〔偈11〕を承けて、

〔偈12〕そして（雨季になって）ここなる（三千大千）世界に出現した（*sthita*）雲から注がれたその当の水（*tat*…*vāri*）はじつに“一味”（*eka-rasa*）なのである。（①と②の）「草・灌木」（*tṛṇa-gulmāḥ*）はその当のもの（*tat*, = “一味の水”）を（それぞれ各自の）力量（*bala*）に応じて、（生えている）境地（*viṣaya*, 環境）に応じて吸飲するのである。

〔偈13〕（さらに）③“より小なるもの”（*khudrāka*, = 「木」（*vanaspati*, ——草、灌木に対しては）中位のもの（である）⁽³⁾）——、④「（小）樹」、そして⑤「大樹」は、年輪に応じて（*yathā-vayāḥ*）、力量に応じて（*yathā-balam*）、総じて水を吸飲する。（即ち）欲望と愛欲に応じて（*yathā-iccha-kāmaṃ*）吸飲する。

〔偈14〕（即ち）丁度、そのように（*yathā eva*）、（それが①「草」であれば）葉片（*kāṇḍa*）でもって、②「灌木」であれば、その上に）茎（*nāḍa*）でもって、表皮（*tvac*）でもって、同じ様に（*tathā eva*）、③「木」や④「小樹」、⑤「大樹」であれば）葉でもって、枝や幹でもって、（総じて）大なる草木等（*mahā-oṣadhīyaḥ*）は雲から注がれた（水を吸飲することによって最後は）花（を咲かせ）、果実（を結ぶ

まで)に成長するのである。

これらは、先の〔偈9〕「台地に生える草木等」をより詳細に述べて、①～⑤の「草、灌木、木、小樹、大樹」の五種に区分けして、〔偈11〕で、それら全ては雲から注がれた“同一味の水”を各自の④力量に応じて、⑥環境に応じて、さらに、「木」については、勿論、「木」(vanaspati)も含めて、「(小)樹」、「大樹」は③年輪に応じて、吸飲して、それぞれが多種多様な花や果実を稔らせると、総括しているのである。

そして、その上で、

〔偈15〕それらのものは力量に応じて、そして、“どのような”環境であるか(に応じて、)〔さらには、その当の種子(bīja)が“どのようなものである”か(yādṛśakam)⁽⁴⁾に応じて〕それらのもの(tāḥ)は、個々別々に滋茂する(prasavam dadanti)。(雲から)注がれたその当の水は“一味”(eka-rasa)である(にも拘らず)。

これは、〔偈12〕で草木等について④力量、⑥環境に応じて、さらに〔偈14〕で、「木」については、③「年輪に応じて」と言った上に、突如、④「『種子』(bīja)がどのようなものかに応じて」を後代になってから追加しているのである。

以上が、雨季になって出現した④大雲のもたらす大量の水と、⑥それによって地上の草木等の繁茂という『喩』の所謂「開譬」である。

(3)

これに続く〔偈16〕以降は所謂「合譬」に他ならない。

〔偈16〕迦葉よ。(あたかも)“水を保有する者”(vāri-dharaḥ, =雲)が(雨季に入って三千大千)世界に(湧き起るように)、まさしくそのように(emeva)、仏陀もまた、ここなる世に出現する。その当の(saḥ)世間の保護者(=仏)は出現して後、生類に真実の(bhūta)所行(cari, =「大乘・菩薩乗」の菩薩行)を説示するであろう(ものである)。

これは、なんと、これまでの〔偈1〕～〔偈6〕で述べてきたところ

の、乾季の終りに出現した『大雲出現の喩』とは全く異なって、〔偈7〕～〔偈14〕で述べているところの、雨季に入って出現した大雲が、その保持する大量の“一味の水”を大地に降り注ぎ、それによって、多種多様の草木群が生育し、繁茂するということでもって、⑧仏の“説法教化”という偉大な行業たる「仏の有する特性」を詳述しているのである。次に、

〔偈17〕 丁度、(雨季に入って) 雲が(世界に湧き起るように) 私は(= 釈尊)(即ち) 如来、両足のもの(= 人間)の至高者、ジナとして、世に出現したのであって、大仙人(たる私)は、天(devaka, 神々)と共なる世間に尊敬される者として、次のように(evam)、聞かしめるのである。

これは、〔偈16〕が「仏一般」について述べたものであるのに対して、その「仏一般」のうちの一員である釈尊に特化して言うものである。じつは、このことは、すでに長行〔9〕と〔10〕とで述べられていたところであって、長行〔9-(A)〕で、「比丘らは仏の説く教法を聞き、憶持し、その明かす修行に専念しながらも、自分自身では、自分が“何”であり、“何”を思念し、“何”を修行し、その結果、“何”を得るのか、全く知らないのである」が、それに対比して、(B)「如来だけがじつにそれら衆生が“何”であるかを如実に知っている」と言っており、これを承けて、〔10〕「この当の私(= 釈尊)もまた、成道時に、すでに「常に般涅槃(= 正覚)を唯一の(eka, = 最勝の)境地とする者、虚空を終極とすることを知ったものであり、云々」とあって、先の〔9〕に相当するのがこの〔偈16〕であり、後の〔10〕に相当するのが〔偈17〕に他ならないのである。

それであるからこそ、〔偈18〕以降は、次のように言う。

〔偈18〕(そして) 私(= 釈尊)は、乾季の終りの草木等のように三有において執著し、四肢の枯渴した一切衆生に(仏法を説いて)満足させる。私は、苦によって乾涸びている者を安楽に住せしめる。

(即ち)(在俗の一般民衆には)愛樂(kāma)を、(出家の比丘らには)涅槃(nirvṛti, 一切苦の消滅)を与える。

[偈19](それ故に)天と人との集団(=人・天界の衆生)よ。私の“声”(=説法、その内容は勿論、「大乘・菩薩乗」)を聞くべし。(即ち)私と出合い(その説法を聞く)ために、(その説法会場に)参集すべし。私こそじつに如来(tathāgata, =真如からやって来た者)、(世間から)尊敬される者(bhagavat)、(何ものにも)打ち負かされることの無い者にして、(一切衆生を)済度(samtāraṇa, =涅槃に渡らせること≠一神教のいう救済)するために、ここなる世界に生まれてきた者(jāta)なのである。

と宣言して、次のように述べる。

[偈20](私は)幾千・コーティの衆生に清浄にして秀でた教法(勿論、それは「大乘・菩薩乗」その中核は『般若経』≠〈仏乗〉)を語る。その(教法)には、“唯^{ゆい}一”(eka)たる平等性(samatā)と如実性(tathatva)、即ち、じつに(一切衆生の)“解脱”(vimukti, 一切の束縛からの解放)と“涅槃”(nirvṛti, =一切の苦の消滅)とが(あるだけである)。

[偈21](私は)常に“菩提”(bodhi, さとり)を端緒(nidāna)となして(kariyāna)、一切の者らに向って、“同一の教法”を告げるのである。それはじつに平等であって、不平等たること(viṣamatva)は存在しない。如何なる憎悪も無く(また、反対に)偏愛も無い。

[偈22](その上)私にはいかなる貪着も存在しない。私には、何に対しても楽著や過悪は無い。一人の人に対するように、同じように(多くの)^{ひと}他人に対して、有身の者ら(=人々)に、平等に(その)教法(=「大乘・菩薩乗」≠〈仏乗〉)を告げるのである。

[偈23](私は)坐っていても、歩いていても、立ち止っていても、他のことは(全く)無くて、(ただただ)(如実たること(tathatva, ありのままに)教法を告げるだけである。横臥台、寝台、床台に上がつ

ていても、懈怠は全然存在しないのである。

ここで大胆に憶測するに、本品は、元から、凡そ仏たる者の有する特性——それは我々衆生にとっては、仏の持っている大いなる功德に他ならない——を、乾季の終りになって出現した『大雲出現』の喩」でもって説き明かしていたのであったが、後になって、それを全く理解すること無き別人が、雨季に入って出現する大雲がもたらす“水”によってこそ、地上の草木は繁茂するのに、そのことを全く言わないのは“奇っ怪千万”であるとして、大雲のもたらす“水”による多種多様な草木の成長という、ただ単なる自然界の現象を述べるだけの『喩』に“大變造”させてしまったのである。それによって、丁度^{ひさし}“廂を貸して母屋を取られる”のように、挙げ句の果に、品名まで「草木品」(oṣadhī-parivarta) となってしまったのに違いないのである。

(4)

これを承けて、次に続く〔偈24〕以降を見るに、

〔偈24〕私（＝釈尊）は **あたかも**、（雨季になって出現した）その当の雲が（地上の草木に）、**等しく**（sama）“水”（vāri）を注いでいるように、この（三千大千）**世界の一切**（sarva-loka, そこに住する衆生）に（教法を説いて）満足させている。（高貴なる）**アーリア民族の者**（ārya, = バラモン階級の者）であっても、**賤しい部族の者**（nīca, = スードラ階級やアンタッチャブルの者）でも、（私（＝釈尊）は）**平等の認識**（tulya-buddhi）を持つ者であり、果ては（atha）、**破戒の者**（比丘）でも、**持戒者**（sīla-vat）でも、

〔偈25〕同様にして、その人々（yena nārāḥ）が**威儀不具足者**（vinaṣṭa-cāritra）でも、**威儀と軌則**（ācāra）を具足した者でも、そして、**異見に固執する者**でも、**邪見の者**でも、**正当な見解を持つ者**でも、**淨らかな見解を持つ者**でも、

〔偈26〕**下劣な考えを持つ者**でも、そして、また、**勝れた考えを持つ者**（utkrṣṭa-mati）でも、**鈍根の者**（mr̥dv-indriya）でも、（私は）平

等に教法を説く。私は懈怠を全て棄捨して、正しく(samyak, = 如実たること(tathatva)のままに)、(一味の)教法の雨を降り注ぐ。

これら三偈は、仏教教団の比丘・比丘尼らを、声聞、独覺と、「大乘・菩薩乗」の菩薩とに区分した上で、〔偈24〕では、「そのような人々(=比丘、比丘尼)に私は平等の認識を懐いている者だ」と言い乍ら、その“舌の根の乾かぬうち”に、これでもか、これでもかと、甚だしい差別用語を投げつけており、これまでのオリジナル『法華經』〈仏乗〉に対する「大乘・菩薩乗」側からの『般若經』の“巻き返し”に比して、極めて過激な反駁、というよりは“逆襲”なのである。それ故、これは〔偈20〕～〔偈23〕よりは後代になってから、別人が持ち込んだ第三次的“後分”に他ならないと考えられる。

さらに、続く〔偈27〕は次のように言う。

〔偈27〕私から(このようにして説かれた教法を)聞いて、(人々は各自の)力量に応じて(yathā balam)、様々な境地に安住することになる。(即ち)心に適った(mano-rāma)天に、人に、果ては(atha)、(天界の)帝釈天に、梵天に、(さらには、人界の)轉輪王に(安住することになる)。

これは、これまでの叙述があくまでも仏教教団に所属する出家の比丘・比丘尼に対するものであったのに、なんと「一般の在俗の人々が、仏の教法を聞いて、望んでいたところにぴったり合った天界の者や人界の者、さらには帝釈天、梵天、さらには轉輪王と成りうるのだ」と言うのである。⁽⁵⁾それ故、これは、後代になってから、恐らくは、仏教中国たるガンジス河中流地域から遠隔の地で、それも、仏教について充分な理解を欠く者によって造作され、ここに持ち込まれたものに違い無い。

(5)

こうして、元は、〔偈26〕に続いて、〔偈28〕以降があったのである。

即ち、先の〔偈26〕で言うところの、釈尊の説いた教法——「大乘・菩薩乗」にして、その中核は『般若經』——を聞いて、比丘・比丘尼ら

がインドの宗教の根本的基盤たる“知行双運”に依って到達するに至った様々な境地について次のように述べている。

〔校訂偈28〕現に今 (iha)、世間に (生えている) 当の (etāḥ) これら草木等 (oṣadhīyaḥ) は、① “小なるものより一層小なるもの” (kṣudra-anukṣudra)、② “小なるもの” (kṣudrika)、そして③ “他のもの” (anya, これは、次の ‘madhya’ (‘中’) に対して、“その他のもの”、即ち、“小なる「木」”の意味)、④ “中のもの” (madhya)、⑤ “大なる (mahat) 樹” (durma, 『現行本』は ‘oṣadhi’ なれど、私に校定) (のよう)に 当の全ての者は (te sarve, 『現行本』は ‘tāḥ sarva’ なれど、私に校定) (この①～⑤の者) なのである。(それをお前たちは) 聞くべし。(私 (= 釈尊) は、①～⑤のそれら全てを) 説き明かそう。

これは、「それら全てを説き明かそう」と謂う。しかし、後に続く〔偈29〕～〔偈33〕を指しているように思えるが、精読するに、どうもそのようには思えないのである。それというのも、

ここで、それらを見るに、

〔偈29〕①無漏なる教法 (= 『阿含経』) を明晰に認識している者であり、涅槃 (= 阿羅漢の境地) を獲得して、(そこに (安) 住しているところの) それらの人々 (‘ye narāḥ’ = 出家の比丘ら)、そして、②六神通と三明を身に備えた者である (bhavanti) ところの、それらの (人々)、それらの者 (sāḥ) は “小なる草” (kṣudrika oṣadhi) と称される者 (saṃpravutta) なのである。

ここに「人々」(nara) と謂うも、勿論、「出家」の宗教修行者であり、仏教では、声聞、独覺、菩薩の三つに区分されるものであって、ここでは、その内の“声聞”を指している。それにも拘らず、“どうして”「声聞」とははっきり言わないのか。その上、〔偈28〕の①～⑤の五種類の比丘らのうちのどれに相当するのか、全く不明で、不可解である。極論すれば、〔偈28〕の語り手 (= 作者) とは全くの別人の手になる、より後になってからの“異質の後分”に違い無いのである。

〔偈30〕そして、山岳や洞窟に住しているところの者 (ye)、独りで覺りを求めているところの人々 (ye narāḥ)、このような“中位の清浄な覺りを有する者” (madhya-viśuddha-buddhyah, これは「草・灌木・木」という一連の複合句のうちの「灌木」を指している) ら (ye)、それらの者ら (sāḥ) は、中位の草木 (oṣadhi, = ここでは「灌木」を指す) と称されている者である。

ここでも、“どうして”「独覺」(‘pratyekabuddha’) とはっきり言わないのか。しかも、①～⑤のどれに相当するかも不明瞭で、これもまた、〔偈28〕とは別人の手になるものであること、明白である。

〔偈31〕人中の牛王たることを目指している者、(即ち)『“ブツダ” (buddha, 覺った者)、人・天の保護者と成ろう』と、精進と禪定を実修しているところの者 (ye)、その当のこれらの者 (sa…iyam) は“最高 (agra) の「草木」” (oṣadhi, = これは、草木一般では無く、「草・灌木・木」の複合句のうちの「木」(vanaspati) を指す) と称される。

〔偈32〕(その中でも、精進と禪定の実修に) 専念している善逝の息子 (sugatasya putra, = 菩薩) らは、(現に今) ここで慈悲行 (= 菩薩の利他行) と寂靜行 (= 菩薩の自利行) を実修しており、(将来に) “人中の王” と成ることに、全くの疑念の無い (という確信) を得たところの者ら (ye)、その当のこの斯くの如きの者ら (ayam…eva-rūpāḥ) は“(小) 樹” (druma) と称される。

〔偈33〕(さらに、その上に) じつに不退転の法輪を転じている者であり、そして神通力に安住しており、(己の成仏に) “心決定の者” (dhīraḥ) にして、(一方では) 多なるコーティの生類を解脱させている (ところの者ら)、それら当の者ら (sāḥ) は、じつに“大樹” (mahā-druma) と称されるのである。

これら三偈は、三乗のうちの「菩薩」について詳述するものであって、その修行階梯を初等、中等、高等の三段階に区分して述べている。この

点は、先の〔校訂偈28c〕の「『小』、『中』、『大』の樹木」という区分を述べている処に相当する。が、しかし乍ら、その所説内容を見るに、これまでの〔偈29〕～〔偈30〕と全く同様に、それとは全く異なり、“どうして”「菩薩」とははっきり言わないのか。しかも、〔偈28〕で「(①～⑤のそれら全てを) 説き明かそう」と言うも、一体、①～⑤のどれに相当するのか、ここでも、不明瞭である。

ここに至って、総じて言えば、これら〔偈29〕～〔偈33〕の五偈は、どの偈においても、文法上の主語 (subject) が表記されておらず、そのため、一種“堂堂巡り”のような体を呈しており、これらの〔偈〕の謂わんとする主旨は、一体、“何”なのか、全く不可解であって、“魔訶不思議”という他ないのである。その結果、〔校訂偈28〕とこれら〔偈29〕～〔偈33〕の五偈との間には、深い亀裂が走っており、断層が存在するのである。それ故に、この五偈は、余程、後代になってから〔校訂偈28〕を全く理解すること無き書写生の手によって、ここに持ち込まれた全くの異質の後分に他ならないと考えられるのである。

このようにして、雲のもたらす一味の水と、それを飲む草木の多様性という『喩』について、次から次へと、まるで競い合うように、別人が各自、自説を繰り出しているのであって、先の〔上〕では“コンペ”と称したが、ここではむしろ『法華経』に対する“逆襲”と言うべきものなのである。

(6)

次に、続く〔偈34〕以降を見るに、

〔校訂偈34〕 丁度、雲によって注がれた水 (vāri) が (一切の草木に) 平等であるように、ジナ (= 仏) によって語られた『正法』
(saddharma, 『現行本』は 'sa dharma' けれど、私に校定、= ⁽⁶⁾ “真の仏法”、
但し、ここでは、あくまで「大乘・菩薩乗」(その中核は『般若経』) で
あって、決してオリジナル『法華経』の〈仏乗〉では無い) は (一切衆
生に対して) 平等なのである。(それにも拘らず) 台地の表層に存す

る草木等(osaḍhīyaḥ, が多種多様であるように)が、(この『正法』を聞いた衆生の側の)“了知”(abhijñā)が(声聞には声聞の、独覚には独覚の、菩薩には菩薩の“了知”というように)これら斯くの如くに種々様々(citra)なのである。

〔偈35〕(お前たちよ。)この譬えの提示によって、如来の(行使する)“方便”(upāyakaṣāya, 衆生に真実を明かすまでの暫定的な、便宜的な仮の手段と、それによって説かれた“仮の教え”を説くも、最後には、その“方便”を捨てて、“真実の教え”(=『正法』=ここでは「大乘・菩薩乗」≠〈仏乗〉)を説き明かすということ)を理解せよ。(即ち、じつに)彼(saḥ, 仏)は「^{ゆいいつ}唯一の”(eka, = “最高の”、“最勝の”)教法”(eka-dharma, = saddharma,)『正法』(ここでは、「大乘・菩薩乗」≠〈仏乗〉)を語るのである。(が、しかし)了度、雲のもたらす雨水は、元々から一滴一滴、別々であって、(その集合体に過ぎないのであるように、衆生の側に)様々な解釈(nirukti)がある(即ち、それら草木等は、その一つ一つが各自別々に、一味の水を飲むのであり、その結果、総体として、多種多様なのである)。

ここに謂う『譬え』とは、勿論、雨季に入って出現した大雲が大量の“一味の水”を地上の生き物に平等に降り注ぐも、それを飲む草木等(osaḍhīyaḥ)が多種多様に生育する様に、如来は一切衆生に“^{ゆいいつ}唯一の、(= “最高の”、“最勝の”)教法”(eka-dharma)、即ち、『正法』を平等に説くのであるが、それにも拘らず、これを聞いた衆生(=出家の比丘等)に「劣乗たる声聞、独覚の二乗の者」と、『大乘・菩薩乗』の菩薩という優劣が生起すると説いているのである。しかし乍ら、その場合、『“どうして”^{ゆいいつ}「唯一の教法」たる『正法』を聴聞しながら、その出家の比丘らに声聞、独覚、菩薩の差違が生起するのか』と反問するに、その回答はこれまでは全く得られなかったのである。もっとも、それは、この『喩』自体が自家撞着に陥って入るからなのであるが、しかし、それは差し置くとしても、ここに至って、始めて、〔偈34〕「ジナ(=仏)は

一切衆生に『正法』を平等に説く」のに対して、衆生の側に「その『正法』の“了知”が種々様々であるから」と言い、〔偈35〕において、オリジナル『法華經』に対比して、“後分”たる「法華經」（即ち、「譬喻品」、「信解品」やこの当の本品（＝草木品）、さらに、後の『妙』「化城喻品」等にあつては、「声聞乗、独覚乗」の二乗はあくまでも“方便”の行使による暫定的な、便宜的な“仮の教え”であり、一方、「大乘・菩薩乗」は、その“方便”を捨てて説かれた“真実の教え”なのであった。ところが、後になって、このような仏の“方便”の行使による教法説示に全く無理解の者が出てきて、手前勝手な理屈を述べたてる故に、ここに、仏は『この“方便”をしっかりと理解せよ』と、一本、釘をさしたのであり、その上で、「仏は“唯一の教法”たる『正法』を説示するにも拘らず、衆生（＝出家の比丘ら）の側に、様々な解釈が生起するのだ」と、始めて明言しているのである。この二偈の本旨は要するに、仏は“唯一の乗”（＝大乘・菩薩乗）を説くにも拘らず、それを聴聞する衆生の“了知”（abhiññā, =理解）、即ち、“解釈”（nirukti）が多様であるからなのであつて、それであるからこそ、雲がもたらす“一味の水”と、それを飲む“草木の多様性”という“自家撞着”が生起しているのである。

このようにして、“「声聞乗、独覚乗の二乗」vs.「大乘・菩薩乗」”における「大乘・菩薩乗」の勝利、即ち、オリジナル『法華經』の〈仏乗〉に対する『般若經』の“巻き返し”は、一層激化して、“逆襲”となっているのであつて、「法華經」の、特に前半部（＝「譬喻品」～「化城喻品」）を一貫して貫き通す大支柱なのである。

ところで、これに対しては、長行〔6〕に「如来は説法会座に参集した衆生（＝出家の比丘ら）の機根や精進努力に様々な差異のあることを認識して、それぞれの者に（適応した）法門を提供する」と言っていることを根拠にしての反論が予想される。しかし、その長行〔6〕は、「如来の保有する特性」を『大雲出現の喩』でもって述べる箇處の文言であつて、直後の長行〔7〕、〔8〕においては、それとは全く別人の手

によって『雨季に出現した大雲のもたらす“一味の水”と、それを飲む多様な草木の繁茂という喩』に“大變造”されてしまっているのある。それ故に、これをもって反論の根拠とは、到底、為しえないものである。

こうして、この〔偈34〕、〔偈35〕はこれまた長行〔2〕～〔6〕とは、全く別の者によって、後になってここに持ち込まれた“第三次的後分”に他ならないのである。

(7)

さて、次に続く〔偈36〕以降を見るに、

〔偈36〕私(＝今仏釈尊)においても、また(この一味である)“法の雨”が降り注がれる時、じつにこの世界(の衆生＝出家の比丘、比丘尼)は全て満足した者となる。しかも(āpi)、この“善説”(subhāṣita、＝所謂「金口直説」)たる教法(dharma)は(全て)“一味”である。(それにも拘らず)衆生は(各自に、てんでに、己の)能力に応じて(yathā-balam)思量する。

〔偈37〕丁度、雨の降り注ぐなかで、あるいは「草、灌木」、あるいは中位の草木(oṣadhi、ここでは「木」(vanaspati)を指す)であっても、丁度、そのように(yathā eva)、また、あるいは、「(小)樹」(durma)であっても、あるいは「大樹」(mahā-durma)であっても、それら全てのものは十方(世界)にあって、(生き生きと)輝くように(yathā)、(そのように衆生は輝くのである)。

〔偈38〕(凡そ、仏の説く教法は、いかなるものであっても、)そのもの(＝教法)の本性(dharmatā、本質)は常に世間(の衆生)を利益せしめて(lokahitāya)、まさしく、丁度、花の咲いた草木等が(ついに)果実(となって熟して)落ちる(pramuñcate)ように、この一切世界(の衆生)もまた喜悅せしめられた者となるのである。

〔偈39〕(すでに)(a)この“善説”たる経(＝阿含経)に通達した者で、(b)漏尽(āsrava-kṣaya)に安立せる者(ye)、それらの者(te)は(声聞の中でも)“阿羅漢”である。そして、(c)森林(vana-saṇḍa)

に（住して）修行する者（cārin, = 独り禅定（瞑想）に励む者）は、
 （d）（草木の中でも）中位に到達した草木（oṣadhi, = ここでは灌木
 （gulma）に相当する）者は“独覚”である。

〔偈40〕正念（＝明晰なる想念）を有し（smṛtimanta）、心決定の者
 （dhīra）ら、三界の一切処において通曉した者、この最高の正覚を
 目指している者たる多なる菩薩ら、それらの者（ti）は丁度、常時
 に「（小）樹」として成長しているのである。

〔偈41〕しかれども（tu）、（それ以上に）（四）禅定を修禅して（三）大
 神通を（身に）備えているところの者（ṛddhimat）ら（ye）、“空性”
 （を説く『般若経』）を聞いて喜悅（prīti）を生起しているところの者
 らにして、（しかも）幾千もの光線を放っているところの者（＝いま
 だ『般若経』未聞の菩薩らにそれを聞かしめるという菩薩の利他行に励
 んでいる者）ら（ye）、それらの者ら（te）も、またじつに（ca
 eva）ここで今、『大樹』（mahā-druma）と称されている（ところの
 者なのである）。

これら六偈は、ここが初出である語句が多数在って、その上〔偈
 39ab〕で「草」を、残りの〔偈39cd〕で、「灌木」を、それぞれ「声
 聞」と「独覚」に相応させているのに、「木」（vanaspati）についての言
 及が全く無く——恐らく、口伝の間に脱落してしまったのであろう——、
 さらに、『般若経』の説き明かした“空性”（＝一切法は空・無自性）の
 教理を聴聞して、喜悅を起す」とあって、余程、後代になってから、こ
 れまでなされてきた『法華経』〈仏乗〉に対する反駁たる「『般若経』の
 “巻き返し”では、極めて“手緩い”として、当時の『般若経』側の、
 それも過激派からの“逆襲”というべき第四次的“異質の後分”に違ひ
 ないのである。

続いて次のように言う。

〔偈42〕迦葉よ。丁度、大雲によって注がれた“水”は（一切のものに
 対して）平等である（samam）。（それにも拘らず）大いなる草木等

(mahā-oṣadhīyaḥ) は多種多様なものに (bahvī) 成長する (のである)。(こうして) 以上のような (仏のなした) 教法——それは元より “方便” を捨てて説かれた “**真実の教え**”、**“真の仏法”** (=^{まこと}「大乘・菩薩乗」その中核は『般若経』) の説示 (dharma-deśanā) は限り無き人類の花として花咲かせる。

ここに、今仏釈尊は、改めて威儀を正して『迦葉よ』と呼びかけて、自分はあくまで以上のような、それも “一味の” 「教法説示」を一切衆生に平等になしてきたのであるが、衆生はそれを各自でんで “了知” (abhiññā, 「知行双運」の “知”) し、その上で、これまた各自が主体的に修行 (= “行”) を実修してきたのであって、それによってこそ、声聞、独覚、菩薩という多種多様の出家の比丘・比丘尼が存在することになったと言うのである。こうして、〔偈7〕から始まってこの〔偈42〕に至るまで、雨季になって出現した大雲は大量の、それも “一味” の水を一切の草木に注ぎかけるにも拘らず、その一味の水を吸飲した草木に多種多様の差異が生起するという自然界の事象に擬えて、それについての自説を次々と、まるで “コンペ” (競演会) のように発表して、凡そ仏たる者、世に出現してひたすらに説法教化をなしてきたのを一層激化させて、その仏の教えの中の「真の仏法」は「三乗のなかの『大乘・菩薩乗』なり」と、逆襲しているのである。

【VI】

こうして、ここに至って第一段偈頌部は次のような〔偈43〕、〔偈44〕をもって終る。

〔偈43〕(私は始めに) “**衆生自身に起因する教法**” (svapratyayam dharma, =ここでは、伝統的正統派仏教たる声聞乗、独覚乗の二乗) を説き明かすも、時の経過した後 (kālena)、(必ず) 『**仏の正覚**』 (buddha-bodhi) を説示する。このことこそ私にとって (mama)、そして、一切の世間の指導者 (仏) たちにとっても、最高の “方便” (=衆生に真実を明かすまでの暫定的な、仮の手段、そして、それによる

“仮の教え”)なのである。

これは、なんと、オリジナル『法華経』「仏乗品」の長行〔3〕と。同じく〔偈19〕との、殆ど同じ語彙を用い乍ら、その実、所説内容は全く相違するものなのである。そこで、それを見るに、

『法華経』「仏乗品」の長行〔3〕(私(=今仏釈尊)は、これまで、)各自がそれぞれ(様々な事物)に執着している衆生をそこから解放するべく、……〈巧みな教化方法〉(upāyakauśalya)を用いて諸の“衆生自身に起因する教法”(svapratyaya dharma, =ここでは、声聞乗、独覚乗、「大乘・菩薩乗」の三乗)を説き明かしてきたのである。(28, 11-14)

同〔偈19〕舍利弗よ。善逝が(これから何を告げようとも、お前たち衆生は)その処に、それに(向っての)“強い志向の具足成就者”(adhimukti-saṃpanna)であるべし。(なぜなら)大仙・ジナは(決して)間違った事を言わない者なのであるから。(それ故、三乗の教法を説いたからには)その後(いかに)永く時の経過した後でも(cireṇa api)、“至高の義”(uttama-artha,) = 「仏の意図のこれから語られるところ」(saṃdhā-bhāṣya, = 〈仏乗〉)を語るのである。

ここで、この①『法華経』「仏乗品」の箇所と②本品のこの当の箇所とを比較するに、①の「衆生自身に起因する教法」は「声聞乗、独覚乗、『大乘・菩薩乗』」の三乗であり、②でのそれは、「声聞乗、独覚乗」の二乗であり、同様に‘upāyakauśalya’は①では〈巧みな教化方法〉であり、②では“方便”、即ち、「衆生に真実を明かすまでの暫定的な仮の手段と、それに依って説かれた“仮の教え”を意味しているのである。それ故に、①の「至高の義」とは、まさしくオリジナル『法華経』の主張する〈仏乗〉に他ならない。それに対して、②では「仏の正覚」(buddha-bodhi, = “方便”を捨てて説かれた「^{まこと}真の仏法」)であるが、その実質的内容は、声聞乗、独覚乗の二乗たる“仮の教え”に対して、「大乘・菩薩乗」(その中核は『般若経』)こそ“真実の教え”なのだと主張し

ているある。一方、㉑ ‘cireṇa api’ と㉒の ‘kālena’ とは全く同じ意味であることは言う迄も無い。これらの点をしっかりと認識した上で、次の〔偈44〕を見るに、

〔校訂偈44〕私（＝今仏釈尊）によって現実に（bhūta）語られた“**真実の義**”（parama-artha）とは次のようなのである（evam）。(即ち)
それら当の聴聞者（‘te śrāvakāḥ’、＝三乗の教法の聴聞者の意味であつて、決して「声聞」の意ではない）の**全ての者**（sarvi）が涅槃に赴く**のでは無い**。これら当の（「大乘・菩薩乗」の）“聴聞者”、(即ち)秀でた**菩提**（行）を行ずる者（ete vara-bodhi-cārikāḥ）だけが（それを）行ずるのであり、(未来に)“**ブッダ**”に成るのである。

ここに謂う“真実の義”とは、先の㉑の「至高の義」(uttama-artha) が〈仏乗〉であったのに対して、決してそうでは無く、三乗のうちの「大乘・菩薩乗」を指すのであり、その説く「菩提行」、即ち、菩薩行をなす者だけが、“ブッダ”(buddha, 仏陀)になるのだ」と明言しているのである。

ここにおいて、この〔偈43〕、〔偈44〕は、〔偈7〕から〔偈42〕に至る間、雨季になって出現した雲が“一味”の大量の水を降り注ぐにも拘らず、多種多様の草木群が繁茂するという『喩』を、それも次から次へとそのバージョン版を繰り出して述べているのに、それについては、それこそ一言半句も言及すること無く、〔偈1〕～〔偈6〕で説いたところの、凡そ如来たる者、世に出現してはただひたすらに“説法教化”、それも三乗のうちの「大乘・菩薩乗」こそ、“唯一の乗”にして、“方便”を捨てて説かれた『真の仏法』であるとする立場に立ち戻っているのである。これは、逆に言えば、〔偈7〕～〔偈42〕は、〔偈1〕～〔偈6〕の後になってから持ち込まれた全くの“異質の後分”に他ならないことを明白に示しているのである。これは、まさしく“^{ひさし}廂を貸して母屋を取られる”であって、^{あげ}拳句の果てに、本品の題名は、恐らく元は「如来出現品」とでもあったものが、「草木品」(oṣadhī-parivarta)と変更さ

れてしまったのだと考えられるのである。こうして、本品の第一段偈頌部はここでもって終わっているのである。⁽⁷⁾

註

- (1) この本考の章、節、文段の番号は、『『草木品』の思想説明〔上〕』（『桂林学叢』第三十五号、令和六年刊行予定に掲載）を継承する。
 - (2) この ‘ambuda’ は、『法華經』において、この当該箇処のみに存する語であって、そのことから、この文段は、余程後代になってから持ち込まれた“異質の後分”と見做したのである。
 - (3) この文段は極めて解りにくい、[木] (vanaspati) は、次の〔(小)樹〕 (durma) に比すれば“より小なるもの” (khudrāka) であるけれども、[草、灌木] に比すれば、“中位のもの” (madhya) であることを言うものと解した。
 - (4) ここに出る ‘bija’ は、長行部では、[校訂 3-㊟] ‘yathā bījam’ と、『土田本』には欠くところの〔3〕の ‘bīja-grāma’ の二箇処のみ、偈頌部では、ここなる〔偈15〕の一箇処の、合計三箇処だけにあるもので、前後の所説内容とは全く繋がるところが無く、しかもその上、『法華經』全体においても、これら三箇処の他には全く存しないという極めて特異な語なのである。それ故、‘bija’ に言及するこれら三箇処の文段は、後代に“いかなる事由によるか”は不明なれども、ここに紛れ込んできた“後分”、それも極めて“特異な後分”であること明白である。
 - (5) しかし乍ら、六道輪廻の一切苦からの“解脱” (= 完全解放) を目指す出家の宗教 (= “沙門”の宗教) の一つたる仏教にとって、それがいかに天界の最高者たる帝釈天や梵天であろうとも、その天界の住人に成らんとするのは全くあり得ないことである。
 - (6) オリジナル『法華經』にあっては、『現行本』の “sa dharmā” は全て、本来は “saddharma” であったと、考えるからである。拙稿〔2022〕を参照。
 - (7) このあとには、〔上〕と〔下〕とを通しての総括と『妙法華』のみに欠くところの「第二段長行部、偈頌部」の精査が残っているが、後の機会を待ちたい。
- (補 1) ここにおいて、諸『日本語訳』を見るに、その全ては、この

‘osadhayah’、[草木等]）を「葉草」と訳している——例せば『中公訳』を挙げるに「なんであれ、およそこの大地の上にはえてきたものの、すなわち葉草にせよ、草、灌木、樹木、あるいは幹の太いもの、巨木となったものにせよ」（九）（I, 154）と、また、さらには「雲はそれらのすべてを飽満させ、草、灌木、樹木も、乾ききった大地も満足させ、また葉草の上にも雨降らせる」（十一）（I, 154）——と言うのである。これでは、地上には、「草・灌木・木」の他に、全く別に、「葉草」の群生が存在するということになる。しかも、その上、今、現代の地球の上空では、気象を観測する人工衛星を始めとして、地上の様相を査察する軍用衛星に至るまで、無数の人工衛星が回っているが、今から二千年もの昔に、雨季に出現した大雲は、「これは「草・灌木・木」であり」、一方では、「これは『葉草』の群生である」と判別する“センサー”を備えていたのだと、いうことになるであろう。尤も、『妙法華』の相当箇処に「山川險谷 幽邃所生 卉木葉草 大小諸樹」（19c20-21）とあるをもって、羅什の『所依梵本』には「葉草」——但し、そのサンスクリット原語が“何”であるのかは全く不明であるにも拘らず——とあることを根拠にして、諸『日本語訳』の全てが「葉草」と訳出しているのであって、それ程までして『妙法華』に追従しなければならないのか。全くもって“奇妙きてれつ”という他ならないのである。